

キーツと大衆・女性・読者*

山 内 正 一

本論では、読者大衆に対するキーツ（John Keats）の態度のアンビバレンス（反発と愛着）の出自に光を当てる。同時に、この態度がもたらす詩人の栄光／成功と悲惨／失敗の内実を明らかにしたい。

周知の通り、キーツの愛読者の多くは——詩人の生前も死後も——女性たちであった¹。ところが、人一倍名声を求めたにもかかわらず、キーツは女性読者への反感を隠そうとはしない。たとえば、出版業者 John Taylor 宛の書簡（1819年8月23日付）でキーツは次のように大見得を切る——「その気になれば人気作家になる自信はあります。でも、けっして人気作家になるつもりはありません。それでも、生計を立てることはできそうです。大衆の人気も女性の愛もどちらも嫌いです。両方とも自立の翼にとっては胸がむかつくほど甘い糖蜜になるからです²」。一見、「大衆の人気」と「女性の愛」を拒絶しているかに見えて、実は、この文章には両者（「胸がむかつくほど甘い糖蜜」）への詩人の愛着が隠されている。キーツにとって、名声と愛は——*Ode on Indolence* が如実に示す通り——彼の心を縛る“demon”（愛憎の的）であった。

キーツの名声欲は、人気作家 Byron への屈折した反応を引き起こす。Byron に対するキーツの心理的距離の変動は、読者大衆——とりわけ女性読者——に対するキーツの態度の揺動の軌跡を知るバロメーターともなる。Byron に熱狂する女性・大衆に自作の価値が分かってたまるものか、との思いがキーツにはあったからだ。おそらくこの思いは、保守系文芸批評雑誌のキーツ攻撃（1818年8～9月）がもたらした詩人のトラウマと関係がある。このトラウマは、自己の理想と読者大衆の趣味との差別化をキーツに要求する。ここから名声（大衆の支持）を求める詩人が大衆を拒否するという自家撞着が生じる。大衆の趣味に迎合せずして、一体いかにしてキーツは読者／名声を得ることができたであろうか。キーツの詩作活動の背後にはこの難問が常に潜んでいた。

難問の解決をキーツが模索する過程で生じる、微妙な＜作者と読者の距離＞がキーツの詩の内容と価値を左右する。キーツが大衆に近づく素振りを見せ始めると同時に彼の作品の劣化が起こることの原因を、この観点から究明してみたい。

*

キーツと大衆の関係を論じる際には、キーツが自分自身を大衆の一員と見なしていたかどうか、という点がまず問題になる。この問いへの答えは“yes and no”である。キーツは大衆のある部分に共感を抱いていたが、同時に、大衆の別の部分に対して強い嫌悪感を持っていたからである。

このことの証拠は、キーツの書簡に見出すことができる。

I have not the slightest feel of humility towards the Public—or to any thing in existence, —but the eternal Being, the Principle of Beauty,—and the Memory of great Men....a Preface is written to the Public; a thing I cannot help looking upon as an Enemy, and which I cannot address without feelings of Hostility....I have no feel of stooping, I hate the idea of humility to [“Multitudes of Men”] —

I never wrote one single Line of Poetry with the least Shadow of public thought... I would jump down Aetna for any great Public good—but I hate a Mawkish Popularity —I cannot be subdued before them—My glory would be to daunt and dazzle the thousand jabberers about Pictures and Books.³

大衆・民衆のためならば命を投げ出すことも厭わぬ、という主旨の発言 (“I would jump down Aetna for any great Public good”)がある一方で、キーツは大衆に対する敵意 (“feelings of Hostility”)を隠さない。一見矛盾した詩人の論法だが、キーツ自身はそこに何の矛盾も感じていないように見受けられる。なぜこのような論法が成り立つのかと言えば、キーツは<人類の一員 (人間社会の構成員) としての大衆>と<詩の読者としての大衆>を区別してものを言っているからである。自分の社会的出自である庶民階級をキーツは大いに尊重する⁴。しかし、彼は、己の詩の共和国の住人としては読者大衆を容易に受け入れようとはしない。キーツは、「甘ったるい、感傷的な人気は大嫌いだ」 (“I hate a Mawkish Popularity”)と公言して憚らない。彼は大衆の低俗な趣味に迎合してまで名声を得ようとは思わぬ、と公言するのである。読者大衆に対してこのように矜持を保とうとするキーツの作品の主題は——詩人自身の言葉を借りて言えば——「永遠なる存在、美の原理」 (“the eternal Being, the Principle of Beauty”)と密接にかかわるものとなるはずである。キーツの野望は、この高邁な主題を用いて読者大衆の耳目を驚かすところにあった (“My glory would be to daunt and dazzle the thousand jabberers about Pictures and Books”).

先の引用箇所は、*Endymion* のオリジナル「序文」の適否をめぐるキーツと友人の議論の中で書かれたものである。とすれば、詩人は *Endymion* の主題そのものが読者大衆の理解を超えたものであることを自覚していたことになる。なぜなら、*Endymion* は疑いもなく “the eternal Being” や “the Principle of Beauty” を主題とする作品であったからだ。にもかかわらず、*Endymion* の出版に際して、キーツは詩人としての名声を獲得する期待——読者の支持を得る期待——を隠そうとはしない。そのことは、*Endymion* 執筆時のキーツの書簡の一節に明らかである。

As to what you say about my being a Poet, I can retu[r]n no answer but by saying that the high Idea I have of poetic fame makes me think I see it towering to high above me. At any rate I have no right to talk until *Endymion* is finished—it will be a test,

a trial of my Powers of Imagination...I put on no Laurels till I shall have finished Endymion....⁵

「詩の名声について私が抱いている高邁な考え」（“the high Idea I have of poetic fame”）という言い回しからも推測される通り、キーツが*Endymion*の読者——彼の名声を保証する人々——として想定しているのは選ばれた具眼の士（一定水準以上の文学的感性の持ち主）である。したがって、キーツ自身が誰よりも良く弁えていたはずである、*Endymion*が「世間受け」（“a Mawkish Popularity”）とは無縁の作品とならざるをえないことを。

*Endymion*のテーマを暗示する、作品執筆中の詩人の発言がある。

I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination—What the imagination seizes as Beauty must be truth—whether it existed before or not—for I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential Beauty. In a Word, you may know my favorite Speculation by my first Book [of *Endymion*] and the little song I sent in my last [Book] ... The Imagination may be compared to Adam's dream—he awoke and found it truth.⁶

キーツの主張を要約すれば、ほぼ次のようなものとなる——「人の心に宿る強い感情（“all our Passions”）は、崇高に高まる際に想像力の発動を促し、心の目（“imagination”の働き）でもって美の本質・本体（“essential Beauty”）を垣間見ることが可能にする。この意味で、想像力はミルトンが描くアダムスの夢（*Paradise Lost*, VIII, 452-90）になぞらえることができる。アダムが見た正夢と同様に、我々の想像力は隠された真実を先取りする力（予表する力）を秘めているのだ。」*Endymion*（特に第1巻と第4巻）は、詩人のこのような思索（“Speculation”）を具体的にドラマ化したものである。「*Endymion*は私の想像力の試験、試練となるでしょう」（“it will be a test, a trial of my Powers of Imagination”）という、キーツの発言からも予想される通り、*Endymion*は作者だけでなく、読者の側の想像力の試験ともなる性質の作品であった。

キーツに限らずロマン派を代表する詩人たちは皆（Byronを例外とすれば）、大なり小なり想像力（imagination）を中心的主題として作品を書いた。Blake、Wordsworth、Coleridge、ShelleyそしてKeatsが論じられる際に、常に“the poetic imagination”や“Romantic imagination”なる用語が用いられるのはこのためである。この辺りの消息を手際よくまとめた文章がある——

We can discuss some ideas that the phrase ‘Romantic imagination’ characterizes if we do not press too hard. For example, it is quite commonly supposed that the Romantic poets regarded the imagination as a peculiar faculty of the mind for the apprehension of that kind of truth which is beyond the power of reason, the senses or common experience

to apprehend. The poet leads the reader into a world which in character is profound, religious, ultimate, and which, but for the poet's imagination, must have remained inaccessible. According to this view, the imagination yields insight into a world that is transcendental or supersensible in its nature. The implication is that there are two worlds, the one available to ordinary people in possession of the usual senses, and the other open only to those who have the imagination or genius to see it. Of course, it is not difficult to find support in Romantic poetry for this view of imagination.⁷

“Romantic imagination” が表現せんとする世界は「超越的、超感覚的な世界」(“a world that is transcendental or supersensible in its nature”)であり、したがって、この種の世界を認識し、理解することは「通常の感覚の持ち主である普通の人々」(“ordinary people in possession of the usual senses”)の力を超えている、という指摘である。これはキーツの作品の多くにもそのまま当てはまる。キーツの詩は、ほとんどの場合、具体的かつ直接的な感覚体験を歌うところから出発する。しかし、その作品の多くは「本質において超越的、超感覚的な世界」(“a world that is transcendental or supersensible in its nature”)の存在を強く暗示する地点にまで行き着く。たとえば、「耳に届く音楽は美しい。だが、耳に聞こえない音楽はより美しい。」(“Heard melodies are sweet, but those unheard / Are sweeter”)という *Ode on a Grecian Urn* の一節 (ll. 11-12) など、まさにその典型である。キーツの作品がそのような世界に深く関与するものであるとするならば、キーツが己の詩を一般読者 (“ordinary people”) の理解を超える詩と考えたのも頷ける。*Endymion* は、ある種のエリートたち——「その世界を見る想像力もしくは天才を持つ人々」(“those who have the imagination or genius to see it”)——の支持を得るべく、あえて読者大衆の趣味を無視して、これに挑戦する姿勢のもとに書かれた作品だ、とすることができよう。

＊ ＊

ある時期までのキーツが読者・大衆を想像力に欠ける輩と見なし、軽蔑していたことは間違いない。そのことは、女性に対する詩人の態度を通してもおのずと透けて見えてくる。

I have been ill temper'd with [“Women”], I have vex'd them—but the thought of them has always stifled the impression that any woman might otherwise have made upon me... Women must want Imagination and they may thank God for it...⁸

ここには「想像力を欠く女性たち」(“Women must want Imagination”)への詩人の反感(ほとんど敵意に似た反感)が見られる。次の引用も同じ友人へ宛てた書簡の一節で、上のもの同様、*Endymion* 執筆時に書かれている。

I am certain I have not a right feeling towards Women—at this moment I am striving to be just to them but I cannot—Is it because they fall so far beneath my Boyish imagination? When I was a Schoolboy I thought[t] a fair Woman a pure Goddess, my mind was a soft nest in which some one of them slept though she knew it not—I have no right to expect more than their reality. I thought them ethereal above Men—I find them perhaps equal....When among Men I have no evil thoughts, no malice, no spleen—I feel free to speak or to be silent....When I am among Women I have evil thoughts, malice spleen—I cannot speak or be silent—I am full of Suspicions and therefore listen to no thing—I am in a hurry to be gone.⁹

詩人にとって永遠の女性であり、理想美のシンボルでもあった女神シンシアと主人公エンディミオンの恋愛を歌う詩 *Endymion* を書いている最中に、作者キーツがこのような女性観を持っていたことを知らされれば、読者は意外の感に打たれる。ここで注目したいのは、キーツの根深い女性不信である。一般読者／大衆へのキーツの不信・不満については既に見た通りである。我々は、ここで思い起こさねばならない、キーツの時代は女性たちが猛烈な勢いで文学作品の読者層を形成し始めた時期でもあったことを。¹⁰ 女性への不満がキーツの脳裏で読者大衆への批判と重なる時、いかなる反応が詩人の内に生まれるか、想像するに難くない——

The more we know the more inadequacy we discover in the world to satisfy us....Mrs Tighe and Beattie once delighted me—now I see through them and can find nothing in them—but weakness—and yet how many they still delight!...This same inadequacy is discovered...in Women with few exceptions—the Dress Maker, the blue Stocking and the most charming sentimentalist differ but in a Slight degree, and are equally smokeable.¹¹

キーツは、自分の文学趣味と女性読者の趣味との間の隔たりを強調する。キーツの目には、身分のいかんにかかわらず女性一般が持つ「不完全さ」(“inadequacy”)が見えてしまうのである。上の発言において、キーツはことさらに自分と女性読者たちとの資質の違いを強調しているように見受けられるが、そこにはある事情が潜んでいた。その事情とは、*Endymion* が出版後数ヶ月にして（1818年8～9月に）文芸批評雑誌に甚だしい酷評を受けたことである。*Blackwood's Edinburgh Magazine* (August 1818) に“Z”という匿名の批評家（John Gibson LockhartかJohn Wilsonと推定される）によって発表された文章の一部を紹介する。

Of all the manias of this mad age, the most incurable, as well as the most common, seems to be no other than the *Metromanie*. The just celebrity of Robert Burns and Miss Baillie has had the melancholy effect of turning the heads of we know not how many

farm-servants and unmarried ladies; our very footmen compose tragedies, and there is scarcely a superannuated governess in the island that does not leave a roll of lyrics behind her in her band-box. To witness the disease of any human understanding, however feeble, is distressing; but the spectacle of an able mind reduced to a state of insanity is of course ten times more afflicting. It is with such sorrow as this that we have contemplated the case of Mr John Keats.¹²

ここには、時代の流行病としての「作詩狂」(Metromanie = Metromania) への言及が見られる。¹³ 猫も杓子も、男も女も筆を執って詩の制作にうつつを抜かす様が、皮肉たっぷりに指摘されている。“Z” 氏の揶揄の対象が主に社会的身分の低い者たち (“farm-servants”、“unmarried ladies”、“footmen”、“a superannuated governess”) に向けられている点に注目したい。この“Z” 氏によって病人や狂人の類と見なされるキーツは、身の程を弁えぬ似非詩人として扱われている。

“Z” 氏の批判は、キーツの mentor であり、いわゆる “Cockney School” の leader でもあった Leigh Hunt にも一部向けられるが、批判の矛先はあくまでもキーツを狙ったものである。

Mr Keats has adopted the loose, nerveless versification, and Cockney rhymes of the poet of *Rimini*; but in fairness to that gentleman [i.e., Hunt], we must add, that the defects of the system are tenfold more conspicuous in his disciple's work than in his own. Mr Hunt is a small poet, but he is a clever man. Mr Keats is a still smaller poet, and he is only a boy of pretty abilities, which he has done every thing in his power to spoil.¹⁴

ここには、キーツの自尊心を傷つけて止まなかったはずの表現が見られる。キーツの背丈が成人男子としてはかなり低いものであったことは良く知られており、キーツ自身もこの点に劣等感を抱いていた節がある。¹⁵ “Z” 氏はこの事実を承知のうえで、意図的にキーツを “a still smaller poet” であり “only a boy” だと揶揄するのである。要するに、ここではキーツは <一人前の男> 扱いをされていない。むしろ、意図的に、キーツの男性としての未熟さや女々しさが強調されている。

キーツがこの種の批評に対して少なからずショックを受け、これに激しく反応したであろうことは想像に難くない。ところが、この種の悪評以来キーツを励まし続けてくれた友人たちに対するキーツの発言から察する限り、少なくとも表面上は、キーツは平静を保っていたかに見えるのである。そのことは、友人 Woodhouse とキーツの書簡のやりとりの中に典型的に見て取ることができる。Woodhouse は *Endymion* の悪評が必ずしもキーツの詩人としての価値を損なうものではないことを力説し、一般読者と本物の読者とを次のように区別してみせる。

That his very equitable censures may have the effect of scaring from the perusal of the Work [i. e., *Endymion*] some of the “Dandy” readers, male & female, who love to be spared the trouble of judging for themselves, is to be expected—But with men of sense...the effect must be the reverse...for the Reviewer in his indiscriminating stupidity, has laid his finger of contempt upon passages of such beauty, that no one with a spark of poetic feeling can read them without a desire to know more of the poem.¹⁶

時代の流行や批評家の言に左右され易い読者（“the ‘Dandy’ readers, male & female”）ならいざ知らず、いやしくも詩や文学の価値を弁えている読者（“men of sense”、“one with a spark of poetic feeling”）ならば、*Endymion* の真価を見抜いてくれるはずだ、という Woodhouse の激励、慰めに対して、キーツは次のように応える。

I am ambitious of doing the world some good: if I should be spared that may be the work of maturer years—in the interval I will assay to reach to as high a summit in Poetry as the nerve bestowed upon me will suffer. The faint conceptions I have of Poems to come brings the blood frequently into my forehead—All I hope is that I may not lose all interest in human affairs—that the solitary indifference I feel for applause even from the finest Spirits, will not blunt any acuteness of vision I may have. I do not think it will—I feel assured I should write from the mere yearning and fondness I have for the Beautiful even if my night’s labours should be burnt every morning and no eye ever shine upon them.¹⁷

世間の評判に惑わされず、本物の読者からの賞賛（“applause even from the finest Spirits”）にさえも心動かされずに、ただ「美しいものへの憧れ」（“the mere yearning and fondness I have for the Beautiful”）から詩を書き続けたい、とキーツは言う。同時に彼は、自分のそのような詩的営みが「人事への関心」（“all interest in human affairs”）を損なうことがないように祈る。なぜなら、彼の究極の野望は「この世に善をなすこと」にあるからだ（“I am ambitious of doing the world some good”）。あれだけの悪評、酷評を蒙ったばかりの23歳の若者の言としては、これに優るものはあるまい。しかし、実は、これはあくまでもキーツの半面であって、我々は詩人の別の一面から目をそらす訳にはいかない。もう一人の友人、Haydon宛の詩人の書簡の一節を見てみることにしよう。

I feel in myself all the vices of a Poet, irritability, love of effect and admiration—and influenced by such devils I may at times say more ridiculous [*sic*] things than I am aware of...I have a little money which may enable me to study and to travel three or

four years—I never expect to get any thing by my Books: and moreover I wish to avoid publishing—I admire Human Nature but I do not like *Men*—I should like to compose things honourable to Man—but not fingerable over by *Men*. So I am anxious to exist with[out] troubling the printer’s devil or drawing upon Men’s and Women’s admiration....¹⁸

ここには、キーツが *Endymion* の酷評から受けたショックの明らかな後遺症が見て取れる。観念としての人間 (“Human Nature”、“Man”) は賛美できても、現実の人間 (“Men”) には嫌悪感を抱いてしまうキーツがここにはいる。キーツは、自分が名声欲をはじめとする「詩人の悪癖」 (“all the vices of a Poet, irritability, love of effect and admiration”) の持ち主であることを隠さない。この一節で興味深いのは、キーツの言い間違い、書き間違いである。キーツは本来 “without” と書くべきところを “with” と書き損ねている。そのために、この部分の文意は次のように変わってしまう——「だから私は、印刷所の小僧の手を煩わせ、読者の賞賛に頼りながら生き続けたいと切望するのです」と。フロイトならずとも、キーツの真意が奈辺にあったかは容易に見抜くことができる。キーツの理想は理想としても、その一方でキーツが世間的な意味での「名声」を強く求めていたことは否定できない。この事実を確認したところで、*Endymion* 酷評後の詩人の行動に目を移してみたい。そこには、読者大衆——とりわけ女性読者——に対する屈折した態度が顕著に認められるはずである。

出版業者 Hessey に宛てたキーツの書簡は、*Endymion* の悪評を契機としたキーツの作詩態度の変化を予感させる。

Praise or blame has but a momentary effect on the man whose love of beauty in the abstract makes him a severe critic on his own Works. My own domestic criticism has given me pain without comparison beyond what Blackwood or the Quarterly could possibly inflict...I have written independently *without Judgment*—I may write independently & *with judgment* hereafter—The Genius of Poetry must work out its own salvation in a man: It cannot be matured by law & precept, but by sensation & watchfulness in itself...I was never afraid of failure; for I would sooner fail than not be among the greatest.¹⁹

ここでのキーワードは “judgment” と “watchfulness” である。最も偉大な詩人たちの仲間入りを期す (“be among the greatest”) キーツは、今後の作詩活動において大いに「分別」と「用心深さ」を発揮することを——つまり、より「大人」になることを——自らに誓う。キーツの “judgment” は、*Endymion* に続く作品群 (*Isabella; or, The Pot of Basil, The Eve of St. Agnes,*

Lamia) の制作に際して強く——ある意味では必要以上に強く——発揮されることになる。これら三つの恋愛物語詩に共通するのは、女性が主人公であり、したがって女性読者の存在をキーツが当然意識していたであろう、という点である。作品 *Isabella; or, The Pot of Basil* について言えば、次の書簡に見られるような事情から、この詩はことのほか詩人の“judgment”と“watchfulness”を要求するものであった。

... [Reynolds] is well and persuades me to publish my pot of Basil as an answer to the attacks made on me in Blackwood's Magazine and the Quarterly Review...I think I shall be among the English Poets after my death. Even as a Matter of present interest the attempt to crush me in the Quarterly has only brought me more into notice and it is a common expression among book men "I wonder the Quarterly should cut its own throat." It does me not the least harm in Society to make me appear little and ridiculous [sic]²⁰

このように *Isabella* は、*Endymion* をこきおろした批評雑誌に対する反論として公表することを友人に勧められた格好の作品だったのである。悪意に満ちた批評雑誌が「自分をちっぽけで滑稽な詩人に見せようと躍起になっても、自分にとっては何の社会的ダメージにもなりはしない」(“It does me not the least harm in Society to make me appear little and ridiculous.”) という、キーツの一目自信に満ちた発言は、アメリカに移住した弟夫妻を心配させまいとする配慮からなされたものである。自分の背丈の低さにコンプレックスを抱いていたキーツが“make me appear little and ridiculous”という表現を用いるとき、そこには彼の無念さが滲んでいる²¹。このこととの関連で、“not the least”なる表現の持つ曖昧さをここで指摘しておきたい。文脈から読めば、もちろん“not the least”は副詞的に“not at all”の意味で用いられているはずである。ところが“not the least harm”と形容詞的に続けて読めば、文意が逆になり「私に少なからざる社会的危害をもたらす」となってしまう。先ほどの言い間違い(書き間違い)の場合に似た、詩人の心の動揺が推し量られる曖昧な表現である。

ところで、はたして *Isabella* はキーツのこの悔しさを晴らしてくれる作品となれたであろうか。キーツ自身のこの詩に対する評価は、次のように否定的なものである。

I will give you a few reasons why I shall persist in not publishing The Pot of Basil—It is too smokeable...There is too much inexperience of live [sic], and simplicity of knowledge in it...There are very few would look to the reality. I intend to use more finesse with the Public. It is possible to write fine things which cannot be laugh'd at in any way. *Isabella* is what I should call were I a reviewer 'A weak-sided Poem' with

an amusing sober-sadness about it...There is no objection of this kind to Lamia—A good deal to St Agnes Eve—only not so glaring.²²

キーツは *Isabella* があまりに “smokeable” (「人に笑われやすい」) という理由で、この詩の出版を渋る。ここで我々は、女性読者への不満を漏らすときにキーツが用いたあの言葉—— “the Dress Maker, the blue Stocking and the most charming sentimentalist differ but in a Slight degree, and are equally smokeable” ——を思い起こす必要がある。キーツは *Isabella* が “mawkish” な (「感傷的で、女性読者向きの」) 作品と見なされることを極力恐れているのである。²³

同じことは *The Eve of St. Agnes* についても言える。キーツの友人 Woodhouse が出版業者 Taylor に書き送った書簡は、キーツが *The Eve of St. Agnes* を “a Mawkish Popularity” を狙った——女性読者受けを狙った——作品とせぬよう、いかに工夫を凝らしていたかを窺わせる。

As the Poem was orig[inall]y written, we innocent ones (ladies & myself) might very well have supposed that Porphyro, when acquainted with Madeline’s love for him, & when “he arose, Etherial flushed &c &c [”] (turn to it) set himself at once to persuade her to go off with him, & succeeded & went over the “Dartmoor black” (now changed for some other place) to be married, in right honest chaste & sober wise. But, as it is now altered, as soon as M. has confessed her love, P. winds by degrees his arm round her, presses breast to breast, and acts all the acts of a bona fide husband, while she fancies she is only playing the part of a Wife in a dream....yet I do apprehend it will render the poem unfit for ladies, & indeed scarcely to be mentioned to them among the “things that are.” [Keats] says he does not want ladies to read his poetry: that he writes for men....²⁴

この書簡で Woodhouse は、*The Eve of St. Agnes* に対してキーツが施した加筆・修正に対する不満を漏らす。キーツの加筆個所にはあまりに露骨な性的描写が見られ、この作品を「女性読者向きでない」 (“unfit for ladies”) ものにしている、というのがその理由である。ところが、友人のこのコメントに対して、当のキーツは「自分の詩は女性には読んで欲しくない。男性のために書いているのだから」 (“[Keats] says he does not want ladies to read his poetry: that he writes for men.”) と答えた、というのだ。はたして、キーツは本気で「女性方に自分の詩を読んで欲しくない」と考えていたのだろうか。答えは「否」である。Woodhouse のこの書簡の7ヶ月前に書かれた、弟夫妻宛のキーツの書簡にはもっと正直な詩人の気持ちが顕れている。

...in a word I am in no despair about [“my affairs”] —my poem [i.e., *Endymion*] has not at all succeeded—in the course of a year or so I think I shall try the public again

—in a selfish point of view I should suffer my pride and my contempt of public opinion to hold me silent—but for your’s [sic] and fanny’s [sic] sake I will pluck up a spirit, and try again—I have no doubt of success in a course of years if I persevere—but it must be patience—for the Reviews have enervated and made indolent mens [sic] minds —few think for themselves—These Reviews too are getting more and more powerful and especially the Quarterly—They are like a superstition which the more it prostrates the Crowd and the longer it continues the more powerful it becomes just in proportion to their increasing weakness.²⁵

キーツは肉親のために——家名を上げるために——名声を欲して止まない。もちろん、そこには次第に逼迫してきたキーツ兄弟（JohnとGeorge）の経済状態もからんでいた。キーツは、いまや、かつてのように悠長に「私には三、四年勉強や旅行をするに足る多少の資金がある」²⁶とってはいらぬ状況に追い込まれていた。また、この書簡中の“fanny”は妹のファニーであると同時にキーツの婚約者のファニーでもあったに違いない。詩人として名を挙げ、財を築くことは、ファニーと結婚するために不可欠の条件であった。このような訳で、キーツは世俗的な意味でも名声を求めざるをえなかったのである。つまりキーツは、女性を含む読者大衆の支持を必要としていたことになる。だが、現実はどうかと言えば、読者大衆は有力な批評雑誌の言いなりになって、正常な自立した判断力を失っている——少なくともキーツには、そのように思えたのである。

1820年7月に出版され、キーツの“swan song”となる詩集（*Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems*）は、詩人としての理想を下げずにいかにして読者大衆の支持を得るか、というアポリア——困難な状況——の下で生み出されたものである。その『詩集』の評判と売れ行きについては、キーツ自身の証言を聞こう。

The sale of my book is very slow, though it has been very highly rated. One of the causes, I understand from different quarters, of the unpopularity of this new book, and the others also, is the offence the ladies take at me. On thinking that matter over, I am certain that I have said nothing in a spirit to displease any woman I would care to please: but still there is a tendency to class women in my books with roses and sweetmeats, —they never see themselves dominant.^{*27}

これを見れば、キーツは、満を持して*Endymion*に続く本格的詩集を公にするに際し、彼なりの遣り方で女性読者に対して配慮を示した節が窺える。その上でキーツは、『詩集』の売り上げを見る限り自分の努力が充分ではなかったことを反省する。興味深いのは、この書簡の受け手であるBrownが上の一節の最後のセンテンスに付けた次の脚注である。

*On what grounds can this opinion rest? Is not “Isabella” dominant to an extreme, in affection and in heroism? Are not his other poetic women mentally dominant, only in a minor degree?...Lord Byron, really popular among women, reduced them, to the offence of some men, to “roses and sweetmeats.”²⁸

キーツが自分の作品の欠点と考えるもの——女性を美化し過ぎて、現実の人間扱いをしていない点——はむしろ Byron にこそ当てはまる欠点ではないか、というのが Brown の意見である。ここから、「キーツ」対「バイロン」対「女性読者」という三者の関係をめぐる興味深い問題が生じてくる。

女性読者に絶大な人気を博していた詩人 Byron に対するキーツの反応は、かなり屈折したものである。*Endymion* 以前のキーツは、Byron への賛美を惜しまない。たとえば、1814年12月（キーツが19歳の時）に書かれたソネット *To Lord Byron* には Byron の作風、詩風への熱烈な賛美が見られる。1817年10月、*Endymion* 執筆中に書かれたキーツの書簡には、次のような Byron への言及も見られる。

I am quite disgusted with literary Men and will never know another except Wordsworth
—no not even Byron.²⁹

これを見れば、この時期には、キーツにとって Byron はまだ Wordsworth と並ぶアイドルに近い詩人であったことが窺える。ところが、1818年8～9月の *Endymion* の酷評以来、文壇の寵児であり、女性読者たちのアイドルであった Byron に対するキーツの態度に微妙な変化が兆し始める。たとえば、“the journal-letters” として有名な1819年冬から春にかけての弟 George 夫妻宛の一連のキーツの書簡の冒頭には、Byron への興味深い言及が見られる。

...and another satire is expected from Byron call'd Don Giovanni [i. e., *Don Juan*]Mr Lewis went a few morning[s] ago to town with Mrs Brawne they talked about me—and I heard that Mr L Said a thing I am not at all contented with—Says he ‘O, he is quite the little Poet’ now this is abominable—you might as well say Buonaparte is quite the little Soldier—You see what it is to be under six foot and not a lord...I was surprised to hear from Taylor the amount of Murray the Booksellers [*sic*] last sale—what think you of £25,000? He sold 4000 coppies [*sic*] of Lord Byron. I am sitting opposite the Shakespeare I brought from the Isle of wight [*sic*] —and I never look at it but the silk tassels on it give me as much pleasure as the face of the Poet itself...³⁰

「背丈が6フィートに満たず、貴族（“a lord”）でもない詩人という状態がどのようなものであるか、分かってくれるだろう」という口吻には、文脈から明らかな通り、Lord Byronとは対照的な己が境遇——財産も、地位も、名声も、読者も持たぬ境遇——へのキーツの口惜しさが透けて見える。ところで、Byronの名声に続けてキーツがシェイクスピア（William Shakespeare）の胸像へと話題を移すのは意味深いことである。同じ“journal-letters”中のキーツの次の言葉に注目したい。

...they are very shallow people who take every thing literal[.] A Man's life of any worth is a continual allegory—and very few eyes can see the Mystery of his life—a life like the scriptures, figurative...Lord Byron cuts a figure—but he is not figurative—Shakespeare led a life of Allegory; his works are the comments on it.³¹

キーツがByronとシェイクスピアを対極に置いて、後者を自分の理想の詩人と見なしていることは言うまでもない。ここで、Byronと自分の相違点に触れた、キーツの次の言葉が想起される。

You speak of Lord Byron and me—There is this great difference between us. He describes what he sees—I describe what I imagine—Mine is the hardest task.³²

Byronはいわば目で書く詩人、それに対してキーツは「想像力」（imagination）で書く詩人という訳である。先に触れた「想像力に欠ける女性たち」（“Women must want Imagination”）がどちららの作品を好むかは、キーツにとって自明のことであった。Byronとキーツの相違点については、キーツの友人Woodhouseの発言も参考になる。1818年10月27日付のキーツの書簡——“the poetical Character”や“the camelion [i. e., chameleon] Poet”について語る有名な書簡（*Letters*, I, 386-88）——の受け取り手であるWoodhouseは、出版業者Taylorに対して詩人キーツの特質・特徴を次のように弁護する。

L[or]d Byron does not come up to this Character [i. e., “the Poetical Character”]. He can certainly conceive & describe a dark accomplished villain in love—& a female tender & kind who loves him. Or a sated & palled Sensualist Misanthrope & Deist—But here his power ends.—The true poet can not only conceive this—but can assume any Character Essence idea or Substance at pleasure. & [Keats] has this imaginative faculty not in a limited manner, but in full universality.³³

キーツ自身の自己分析を咀嚼し、納得した上で、Woodhouseはキーツの内にByronとは異質のシェ

イクスピア的資質 (“this imaginative faculty”) を認めている³⁴。この Woodhouse の読者大衆 (“the mass”) に関する次の発言は、キーツという詩人の特質を誰よりも良く知る人物の意見として、傾聴に値する。彼は、キーツと当時の読者大衆との間に横たわる溝の深さを次のように指摘する。

It is true that in this age, the mass are not of soul to conceive of themselves or even to apprehend when presented to them, the truly & simply beautiful of poetry.—A taste vitiated by the sweetmeats & kickshaws of the past century may be the reason of this. Still fewer of this generation are capable of properly embodying the high conceptions they may have—and of the last number few are the individuals who do not allow their fire & originality to be damped by apprehensions of shallow censures from the groveling & the “coldhearted.”³⁵

前世紀以来の「甘ったるい菓子や手の込んだ料理の様な作品」 (“the sweetmeats & kickshaws”) に害された趣味の持ち主である当今の読者大衆は、本物の素朴な詩の美しさを理解できぬ、というのが Woodhouse の——キーツ支持者たちの——大衆観である。Woodhouse によれば、崇高な概念を適切に表現できる人たちの中にさえも「権威におもねる薄情な批評家たちが下す、浅薄な非難に対する不安から、せっかくの独創的な意見に水を差されてしまう人が多い」というのだ。もしそうであれば、キーツの作品が読者大衆の支持を得る可能性は極めて少なかった、と言わざるをえない。

1819年の6月頃からキーツの経済状態は目に見えて悪化し、友人 Haydon の度重なる借金申し込みにも応じられない状況に立ち至る。キーツの執筆態度に著しい変化——現実主義への傾斜——が兆し始めるのはこの頃からである。たとえば、1819年9月の友人 Dilke 宛書簡には、なりふり構わずに文筆で生計を立てようとする詩人の姿勢が見られる。

Yes I will traffic [*sic*]. Any thing but Mortgage my Brain to Blackwood. I am determined not to lie like a dead lump. If Reynolds had not taken to the law, would he not be earning something? Why cannot I—You may say I want tact—that is easily acqui[r]ed... I would willingly have recourse to other means. I cannot; I am fit for nothing but literature...I have no trust whatever on Poetry—I dont [*sic*] wonder at it—the ma[r]vel i[s] to me how people read so much of it.³⁶

宿敵 Blackwood 誌以外であれば、必ずしも詩作に拘らずに、幅広く文筆を揮って生計を立てたい、という意志の表明である。これを見れば、たとえ一時的にせよ、キーツのかつての理想主義が影を潜める時があったことが分かる。1819年7月から8月にかけて書かれた友人 Brown との合作劇 *Otho the Great. A Tragedy in Five Acts* や、これまた Brown と共同で同年11月から12月にかけて書かれ

た、Byron張りの風刺詩 *The Cap and Bells; or, The Jealousies*（未完）などの作品は、共に俗受けを狙った野心作であり、その目的は世俗的な成功と収益を上げることにあった。結果的に、そこには我々が知るキーツのあの詩風——キーツをキーツたらしめる詩風——は見られない。考えてみれば、『1820年詩集』がキーツのこの現実主義に汚染されなかったのはほとんど奇跡に近いことである。逼迫した経済状況にもかかわらず、キーツが『1820年詩集』において読者大衆の趣味に妥協・迎合しなかったことは、彼の次の発言に明らかである。

My book [i. e., *The 1820 Volume*] is coming out with very low hopes, though not spirits on my part. This shall be my last trial; not succeeding, I shall try what I can do in the Apothecary line.... Thus far I have a consciousness of having been pretty dull and heavy, both in subject and phrase; I might add, enigmatical. I am in the wrong, and the world is in the right, I have no doubt.³⁷

しかし、引用の最後の文章「私が間違っているのであって、世間の方が正しいことは疑いない」という、自分のこれまでの詩風・作風についてのキーツの反省は看過できない。かつて「私は世間が嫌いだ」(*Letters*, II, 133 [To Fanny Brawne, 25 July 1819]: “I hate the world”)、「全体から見て、私は人間が嫌いだ」(*Letters*, II, 243 [To Georgiana Keats, 15 January 1820]: “Upon the whole I dislike Mankind”)と言って憚らなかったキーツの言葉——「私が間違っているのであって、世間の方が正しいことは疑いない」——は、キーツが世間的な意味での大人の詩人に一歩近づいたことを示唆してはいないだろうか。

それにもかかわらず、この後もなお「私は死にたい。貴女と一緒にあって微笑んでいる残酷な世間にはうんざりだ。男は嫌いだ、女はもっと嫌いだ」(*Letters*, II, 312 [To Fanny Brawne, August (?) 1820]: “I should like to die. I am sickened at the brute world which you are smiling with. I hate men and women more.”) という、恋人ファニーへの詩人の哀訴を耳にするとき、我々は、キーツと読者大衆との関係がおそらくは最後まで不幸なものであったことを認めざるをえない。彼にとって——逆説的ではあるが——幸いなことに、大人の詩人キーツにはもはや詩作の時間は残されていなかった。

注

* 本稿は、日本英文学会九州支部第57回大会（九州大学、2004年10月23日）のシンポジウム「イギリス・ロマン派詩人と民衆」での口頭発表に加筆を施したものである。なお、本稿は平成17（2005）年3月7日に福岡大学研究推進部に入稿したものである。

1 この事実は、今日のフェミニスト批評家たちによって、多面的かつ発展的に論じられている。その中から、本論の論点と密接な関係を有する論文として次のものを挙げておく。

Cf. Margaret Homans, “Keats Reading Women, Women Reading Keats,” *Studies in Romanticism*, Vol. 29 (Fall 1990), pp. 341-70; Susan J. Wolfson, “Feminizing Keats,” *Critical Essays on John Keats*, ed. Hermione de Almeida (Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1990), pp. 317-56.

2 See H. E. Rollins, ed., *The Letters of John Keats: 1814-1821*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1958), II, 144: “I feel every confidence that if I choose I may be a popular writer; that I will never be; but for all that I will get a livelihood—I equally dislike the favour of the public with the love of a woman—they are both a cloying treacle to the wings of independence.” キーツの書簡からの引用はすべてこれに拠り、以下 *Letters* と略記する。

3 *Letters*, I, 266-67 (To Reynolds, 9 April 1818).

4 キーツは人類の進歩・成熟が民主主義（democracy）によって達成されることを信じていた。See *Letters*, II, 193 (To the George Keatses, 18 September 1819): “All civiled [*sic*] countries become gradually more enlighten’d and there should be a continual change for the better....there has been a gradual change—Three great changes have been in progress—First for the better, next for the worse, and a third time for the better once more. The first was the gradual annihilation of the tyranny of the nobles....kings were lifted by the people over the heads of their nobles, and those people held a rod over kings. The change for the worse in Europe was again this. The obligation of kings to the Multitude began to be forgotten....Then in every kingdom therre [*sic*] was a long struggle of kings to destroy all popular privileges. The english were the only people in europe who made a grand kick at this...The example of England, and the liberal writers of france and england sowed the seed of opposition to this Tyranny—and it was swelling in the ground till it burst out in the french revolution—That has had an unlucky termination. It put a stop to the rapid progress of free sentiments in England.... [Our Court] spread a horrid superstition against all innovation and improvement—The present struggle in England of the people is to destroy this superstition. What has rous’d them to do it is their distresses—Perpaps [*sic*] on this account the pres’ent [*sic*] distresses of this nation are a fortunate thing....”

5 *Letters*, I, 169-70 (To Bailey, 8 October 1817).

6 *Letters*, I, 184-85 (To Bailey, 22 November 1817).

7 T. J. Diffey, “The roots of imagination: the philosophical context,” *The Context of English Literature: The Romantics*, ed. Stephen Prickett (London: Methuen, 1981), p. 172.

- 8 *Letters*, I, 293 (To Bailey, 10 June 1818).
- 9 *Letters*, I, 341 (To Bailey, 18 July 1818).
- 10 キーツの時代を扱った読者／読書論としては、次の文献が有益である。Cf. Richard D. Altick, *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*, 2nd ed. (Columbus, Ohio: Ohio State U. P., 1998); William St Clair, *The Reading Nation in the Romantic Period* (Cambridge: Cambridge U. P., 2004).
- 11 *Letters*, II, 18-19 (To the George Keatses, 31 December 1818).
- 12 G. M. Matthews, ed., *Keats: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), pp. 97-98.
- 13 ちなみに *OED* は、“Metromania” の使用例（1818年）としてこの個所を挙げている。
- 14 G. M. Matthews, p. 104.
- 15 キーツの背丈は正確には5フィート4分の3インチ（1メートル54センチ余り）。ちなみに、Wordsworth は5フィート9インチ以上（1メートル75センチ余り）、Byron は1メートル73センチ程あった。
- 16 *Letters*, I, 379 (Woodhouse to Keats, 21 October 1818).
- 17 *Letters*, I, 387-88 (To Woodhouse, 27 October 1818).
- 18 *Letters*, I, 414-15 (To Haydon, 22 December 1818).
- 19 *Letters*, I, 373-74 (To Hessey, 8 October 1818).
- 20 *Letters*, I, 393-94 (To the George Keatses, 14 October 1818).
- 21 “ridiculous” の誤字・誤記 (“*rediculous*”) には、キーツの心理的赤面——自意識過剰による傷つきやすさ——を暗示するものがある。Cf. Christopher Ricks, *Keats and Embarrassment* (Oxford: Clarendon Press, 1974), Chapter 2 (“Keats and Blushing”), pp. 19-49.
- 22 *Letters*, II, 174 (To Woodhouse, 22 September 1819).
- 23 Cf. *Letters*, II, 162 (Woodhouse to Taylor, 19 September 1819): “[Keats] said he could not bear the former [i.e., *Isabella*] now. It appeared to him mawkish.”
- 24 *Letters*, II, 163 (Woodhouse to Taylor, 19 September 1819).
- 25 *Letters*, II, 65 (To the George Keatses, 19 February 1819).
- 26 See *Letters*, I, 414-15 (To Haydon, 22 December 1818): “I have a little money which may enable me to study and to travel three or four years—I never expect to get any thing by my Books: and moreover I wish to avoid publishing.”
- 27 *Letters*, II, 327 (To Charles Brown, August [?] 1820).
- 28 *Letters*, II, 327-28n.
- 29 *Letters*, I, 169 (To Bailey, 8 October 1817).
- 30 *Letters*, II, 59, 61, 62 (To the George Keatses, 14 February 1819).
- 31 *Letters*, II, 67 (To the George Keatses, 19 February 1819).
- 32 *Letters*, II, 200 (To the George Keatses, 20 September 1819).
- 33 *Letters*, I, 390 (Woodhouse to Taylor, about 27 October 1818). Woodhouse のキーツ弁護につ

いては、次の書簡も参照されたい。See *Letters*, I, 383 (Woodhouse to Mary Frogley, 23 October 1818): “In all places, & at all times, & before all persons, I would express, and as far as I am able, support, my high opinion of [Keats’s] poetical merits—Such a genius, I verily believe, has not appeared since Shakspeare [*sic*] & Milton....”

34 このこととの関連で、Byronの世俗性に触れるキーツ自身の発言が思い出される。See *Letters*, I, 395: “...there are two distinct tempers of mind in which we judge of things—the worldly, theatrical and pantomimical; and the unearthly, spiritual and ethereal—in the former Buonaparte, Lord Byron and this Charmian hold the first place in our Minds....”

35 *Letters*, I, 381 (Woodhouse to Keats, 21 October 1818).

36 *Letters*, II, 178-79 (To Dilke, 22 September 1819). 同趣旨の発言は、友人Brown宛のキーツの同日付書簡にも見られる。See *Letters*, II, 176-77 (To Brown, 22 September 1819): “In no period of my life have I acted with any self will, but in throwing up the apothecary-profession. That I do not repent of. Look at x x x x x [i. e., Reynolds]: if he was not in the law he would be acquiring, by his abilities, something towards his support. My occupation is entirely literary; I will do so too. I will write, on the liberal side of the question, for whoever will pay me... I shall not suffer my pride to hinder me...If I can get an article in the ‘Edinburg’, I will.”

37 *Letters*, II, 298 (To Brown, about 21 June 1820).